

ひな菊の人生（吉本ばなな著：ロッキング・オン）

装幀が気に入った本はそれだけで宝物になるんだ。例えば、映画“ネバーエンディングストーリー”にでてくるダブリンに飾られた本とかさ。

奈良美智さんの絵とのコラボレーションにひかれて「ひな菊の人生」を読んだ。

自分という箱。自分で詰め込むしかない箱。僕は何を入れていこう？

ひな菊はヤキソバ焼きのプロだ 毎日最高の材料を使って、最高のヤキソバを焼く。親友のダリアが「この味が最高」といつてくれたヤキソバ。母の味のヤキソバ。ひな菊はヤキソバを作り続ける。ダリアの思い出、亡き母の思い出、関わってきた人達の思い出を全部がレシピになるのだ。

ものを持たないひな菊の部屋にあるものは、布団と、冷蔵庫と、ダンボール箱。

ただっ広い部屋の中でひとり、窓から空を眺める。

生とか死とかは、そう特別なことではないだろうか？僕の生まれる前からずっと、自然の営みの中で、早いか遅いか誰にでも訪れていること・・・

じゃあ一体、自分の人生って何だろう？

やってきたことの記憶、あの人との記憶、そしてこれから廻り逢うだろう全てのこと、ひとつひとつ思い出に変えて紡いで抱えて、自分の中に入れていけたなら。

終わりなんて怖くない！

いつか旅発つその時が来ても、僕は持っていける。誰かの胸の中にも残してもいけるよね、僕の人生という贈り物。

—「楽しかったからいいそびれて。」—

最後の挨拶だって、このセリフで、思い出にしちゃおう。

中島秀樹氏の装丁は、ばななさんの小説と奈良さんの絵を、各々別々に、別珍風の皮に包んで箱に入れたもので、どっちの本を取り出そうとしても、両方引っ張り出さないとでてこない。まるでダリアとひな菊みたいなのだった。

朗読をする、してもらうことに、愛情の本質をみる。本という普遍な物語を共有することは、一見クールそうに見えるが、不安定で儚い二人の関係をホットに"リンク"するのに最上の手段なんじゃないか？

幼い頃、おやすみの時には、母に童話を読んでもらうのが大好きだった。すっかり登場人物になりきって物語ってくれた母と過ごしたひと時。それは、母と僕の思い出となって、脳裏にくっきりと焼きついている。そしてその思い出は僕に、今でさえ、眠りにつく前は髪をなでられるよりも、お話を聞いていたいと願わせてしまう。たとえ童話や小説じゃなくたって・・・

朗読という行為を通して、相手や周りの状況を観察し理解しようとする。二人の物語を語るのではなくて、書物というワンクッションの距離をとって、できるだけできるだけわかろうと努める。初恋という喜びの真っ只中にも、その後の突然の別れ、予期せぬ再会の後も、二人は間に物語を置くことを止そうとは考えなかった。

過ぎた感情はなにもかもアヤフヤになっていくけれど、本当の物語は消えることはない。それは歴史という事実も同じ。愛情に添えて、どんな記憶を残していったらいいのか、深く考えさせられた。

ベルンハルト・シュリンク氏は、もともと弁護士で、本国ドイツではミステリー賞も受賞しているという。状況を変な色気を出すことなく飄々と書き綴る文体に対して、場面展開はかなりショッキングだ。そんなところもすごく面白いのだった。

死んだ恋人に思いを残す女の子（渡辺博子）、その恋人と同級生であった同姓同名の女性（藤井樹）、彼女は博子と瓜ふたつ……。ややこしい設定だけど、この二人の文通を軸に綴られた、繊細で透明感溢れる物語。

—お元気ですか？私は元気です。—

何通も手紙のやりとりがあるけど、ラブレターとして書かれた（描かれた）のは、この一通と最後に出てくる一枚のカードなんだろう。亡くなってしまった者に宛てた、どれももう伝わる宛てがないとわかっていて出された手紙だから申し分なく切ないし、実はラブレターなんてものは[自分の内面に宛てる]そんなものかもしれなくて（というのも、僕がはじめて出したのも「そうですか、別れましょうか、、、」だったりするので）、なんて想ってまたポロリとするのだった。そして、同じ男に関わりがあった二人の女性の文通によって「藤井樹」という理想の男性像を書き上げた物語でもある。

必死で愛した男の過去を教えてもらおうとする博子が痛々しい。本当に「私」を愛してくれたんだらうか。不安がかすめた心を取り戻すために、彼女は必死で探ろうとする。そうすることで彼を好きでいることを忘れようとする。とても、痛いよ。

作者の岩井氏の趣向と僕のそれは合っていたみたいで、読み終わった頃には、まんまと「樹」に惚れていたよ。

硝子をやっていて、雪山にも登って、よけいなことなんか喋らなくて、「青い珊瑚礁」を歌っちゃうようなお茶目なところもあって、ラブレターにその人の肖像画を描く様なオトコって、、、格好良すぎだよね？

拝啓、渡辺博子様。

あなたの言う通りひと目惚れは信じていいと思います。

とかく人はいろんなことに理由をつけたがるものだけど、そこに何の意味があるのでしょうか？どうかあなただけの思い出を信じていてください。

君はひと目惚れって信じる？